

# 中世・草戸千軒探検 ②1

～作る(塗師)～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を詳しく紹介しています。

前回に続いて、「ものづくり」にかかわった職人の世界を展示資料から紹介します。今回は「作る(塗師)」のコーナーです。



(写真1) 漆と砥石の入った土器椀



(写真2) 漆を塗るための筥



(写真3) 漆を塗るための刷毛

塗師とは、漆塗りの職人、つまり漆器を製作する職人のことです。草戸千軒町遺跡からは、さまざまな種類の漆工用の道具が出土しており、この町を拠点に活動する塗師が存在したことが明らかになっています。

出土した漆塗りの道具には、漆を入れた容器(写真1)や、漆を塗る筥(写真2)・刷毛(写真3)のほかに、下地を平滑に整えるための砥石(写真4)などもあります。漆工のさまざまな工程に及ぶ道具が出土しており、当時の漆工技術の実態を明らかにするうえでの貴重な資料となっています。

その一方で、漆器の素材となる木地、つまり白木の器やその製作に関する資料は確認できていません。そのため、木地は草戸千軒以外の別の場所で製作され、草戸千軒では漆塗りだけが行われていたと考えられます。つまり、草戸千軒をめぐる漆器生産では、一定の分業が成立していたことが想定できるのです。

さて、遺跡では漆工の道具だけでなく、製品としての漆器も数多く出土しており、これらの多くは草戸千軒の塗師たちによって製作されたものと考えられます

(写真5)。製品は椀や皿といった食器類が大部分を占めており、文様の描かれたものが目立ちます。文様には草花や鳥など、身の回りの自然をモチーフにしたものが多く、その筆遣いは伸びやかで非常に洗練されています。おそらく、かなり水準の高い漆工技術が草戸千軒の町にもたらされていたものと思われませんが、その技術がどこからもたらされたものかは明らかにできていません。近年では、中世遺跡の調査が進み、日本列島の各地で漆器生産の行われていたことが明らかになってきています。今後は、各地における漆工技術の比較研究を進めることによって、そうした技術の系譜を解明していかなければなりません。



(写真4) さまざまな形態の漆工用砥石



(写真5) 遺跡から出土した漆器の椀・皿

(主任学芸員 鈴木康之)